



TITLE:

条件文とディスクール

AUTHOR(S):

喜田, 浩平

CITATION:

喜田, 浩平. 条件文とディスクール. 仏文研究 1995, 26: 1-16

ISSUE DATE:

1995-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137835>

RIGHT:

条件文とディスクール

喜 田 浩 平

現代フランス語において、二つの文 P と Q を si で接続した Si P, Q という構文が条件や仮定とその帰結を表すものと解釈される場合、これを条件文と呼ぶ。本稿は、条件文の働きを「ディスクールの観点から記述する」方法¹⁾について考察し、その有効性を示唆するものである。

I. 基礎概念

議論を進めるに先立って、必要な概念を規定しておこう。

「発話」(énoncé)を観察の対象にする。この概念は、言語を単なる記号の体系とは捉えずに、コミュニケーションの手段として理解する言語観に基づくものである。ここでいうコミュニケーションは、メッセージの伝達という機能だけではなく、人間どうしが言語を使って働きかけ合うこと、例えば命令や質問などの行為も指す。このような目的を達成するのに十分なまとまりを持った最小の言語的実体を発話と呼ぶ。いわゆる「文」がほぼこれに相当するが、文法研究で言う平叙文だけではなく、命令文、疑問文、感嘆文なども含む。また、「Chouette!」や「Tant pis!」のように、文を形成するに至っていない表現も、コミュニケーションの機能を担っていると判断される限りにおいて一つの発話である。また、本稿で中心的に論じる条件文については、Si P, Q という形式全体が一つの発話を構成すると考える。

発話は単なる記号の列ではない。特定の人間が特定の状況で使用し、特定の人間が解釈して意味付けを行った記号列が発話である。純粹に形式の面から見ると同一の記号列でも、異なる発話と見なされる場合がある。例えば、「Il fait beau.」という記号列を、異なる人間が異なる場所で使用したなら、あるいは同じ一人の人間が異なる状況で使用したなら、それは異なる発話である。また、同じ一つの記号列を同時に複数の人間が解釈し、それぞれ異なる意味付けを行った場合、それは全て異なる発話である。

次は「ディスクール」(discours)について。この語を普通の意味よりも狭く使う。これは、ある特殊な結び付き方をした二つの発話の連鎖を指す。「Il est riche. Il doit être heureux.」のような構造がその一例である。二つの発話の単なる列挙ではなく、一方が他方の理由あるいは正当化の論拠として提示され、前者を認めると後者も認めることが自然で理に適ったもの、と解釈さ

れる構造のことである（ただし、発話者が実際にそのような意図を持って発話したとか、発話の受け手が実際にそのように解釈する、という意味ではなく、あくまでも二つの発話の結び付き方の問題である）。前者を「論拠」(argument)、後者を「結論」(conclusion)と呼ぶ。

任意の発話を二つ組み合わせ、特定の状況を設定して解釈する場合、「自然」なディスクールと「不自然」なものに分かれる。この区別は、記号列の形式的な結び付きが「文法的」である、あるいは「非文法的」であるという区別とは全く異なる概念である。自然なディスクールとは、文脈の中で、論拠と結論の関係付けが容易にできる発話の連鎖のことであり、不自然なディスクールとはこの関係付けが困難なものを指す。あくまでも二つの発話間の関連付けが問題であって、一つ一つの発話を取り出して、そこで使用されている記号列が非文法的であるとか、その発話がそれ自身で意味付けが困難である、というようなこととは異なる。また、自然さにしても不自然さにしても、文脈との関連で決定されるものである。したがって、ある文脈で自然だと判断されるディスクールが別の文脈では不自然であると判断されることも十分あり得る。たとえば、「Il a peu mangé. Je suis contente.」というディスクールは、食事制限をしている男の妻の発言としては自然だが、病後の体力回復の途中にある男の妻の発言としては不自然である。「Il a un peu mangé. Je suis contente.」というディスクールにはちょうど逆の判断が下される。

二つの発話、つまり論拠と結論は、上に挙げたような例では論拠—結論の順であったが、逆に結論—論拠の順の場合もある。「Je ne vais pas louer cette salle : elle est chère.」や「Je suis content : il y a eu une rapide amélioration.」などがその例である。

また、論拠あるいは結論が、明示的に言語化された形式の助けを借りてディスクールに導入されることがある。「Il a un peu mangé. Il doit donc aller mieux.」では結論が *donc* によって導入されている。また「Elle est malade. Car elle a trop mangé.」では論拠が *car* によって導入されている。結論を導入する形式にはこのほかに *ainsi* や *par conséquent* などがある。論拠は *puisque* や *en effet* によっても導入される。

ディスクールを構成するのは、いわゆる平叙文だけではない。「Il fait beau. Allons nous promener!」や「Il est tard. Dépêche-toi!」ではいずれも論拠—結論のディスクールで結論が命令形で表現されている。またアンスコンブルとデュクロが指摘するように²⁾、「C'est un peu idiot d'abandonner ton poste. Est-ce que tu pourras trouver mieux à Lyon?」あるいは「Tu ne devrais pas quitter ton appartement. Est-ce que le quartier te déplaît vraiment?」のような連鎖も、結論—論拠というディスクールを形成し、疑問形が論拠の役割を果たしている。先に発話の概念に言及したのは、このような現象も考慮に入れるためである。

ディスクールは、「推論」(inférence)の関係にある二つの「命題」(proposition)と全く異なるものである。平叙文が表現する内容で、状況に応じて真偽が決定できるものを命題と呼ぶ。二つの命題があり、一方が真であるすべての状況でもう一方も真であるような関係にある場合、前者から後者を推論によって導くことが可能、あるいは両者は推論の関係にある、と呼ぶ。前者が偽である状況で、後者が真であるか偽であるかは問題にならない。例えば、「Il est Parisien.」と「Il est Français.」あるいは「J'ai acheté une 2CV.」と「J'ai acheté une voiture.」はそれぞれ前

者から後者を推論によって導き出すことができる関係にある。上の「Il est riche...」の例は、一見すると推論の関係を表しているように見えるかもしれないが、ディスクールと推論には決定的な違いがある。まずそれぞれを構成する要素の性質が違う点である。ディスクールの構成する発話は多くの場合真偽が決定できないものである。また、推論は例外のない必然的な関係であるが、ディスクールでは論拠が結論を正当化するだけで、二つの発話の結び付きに真実味があるだけで十分である。

次に、「潜在的な結論」(conclusion virtuelle)という概念を規定する。ある一つの発話だけが与えられ、それを論拠とした場合にどのような結論があれば自然なディスクールが構成されるか、と問うことが可能であると措定する。ある論拠に対して、明示的に言語化されていないがあたかも暗黙のうちに主張されているかのように想定できる結論を「潜在的」と形容する。例えば「Il parle anglais.」という発話を特定の状況と文脈の中で解釈すると、「彼は頭が良い。」とか「彼を雇用すべきである。」などの結論を想定すればディスクールの構成することができる場合がある。これらがすべて潜在的な結論である。一見するとこれは、グライス³⁾の「暗意」(implicature)と実質的に同じものであるような印象を与えるかもしれないが似て非なるものである。グライスのこの概念は、言語表現を解釈する人間が文を命題として捉え、暗黙の前提や様々な原理を組み合わせ、論理的な推論の連続を経て算定(calculate)する言外の意味を指す。ここでいう潜在的結論は、あくまでも命題に還元され得ない発話という概念に基づいて規定されるものである。また、暗意は、ある言語表現が実際に伝達すると仮定される言外のメッセージであるが、潜在的結論は文字通り潜在的なものであり、実際に話し手が意図しているとか、聴き手が理解しているとは限らない。理論上の可能性だけが問題になる。

最後に、「情報」(information)の概念について。形式意味論などで、平叙文の「意味」を定義する際に、その文が記述する「事態」(état de choses)、あるいは文を命題と見なしそれが真であると認定されるために満たされるべき「真理条件」(conditions de vérité)という概念が使われるが、これを一括して文の情報と呼ぶことにする。したがって、上に見た推論の関係にしる暗意にしる、まさに情報に基づいて規定される概念である。後で見るように、ここで提示されているディスクールの理論は、情報には左右されないディスクール独自の性質に注目するものである。

II. 例 証

以上の概念によって設定される枠組の中で、語彙や構文がどのように記述できるか、アンスコンプルやデュクロの研究⁴⁾を援用しながら例証してみよう。とりわけ、情報の側面とディスクールの観点を対比させ、後者の自立性を浮き彫りにするのが狙いである。

まず peut-être について。次のような発話を出発点にする。

J'aurai peut-être un long voyage à faire en voiture.

ここから得られる情報は、「自動車を使って旅行に出る可能性がある。また、旅行が実現しないかもしれない、実現と非実現の可能性は五分五分である。」といったところであろう。次のような対話は、この情報に基づいて成り立っていると言える。

A : — Il y a un problème. Je n'ai pas beaucoup d'essence dans la voiture, et j'aurai peut-être un long voyage à faire en voiture.

B : — Pas de problème. Si tu dois partir, je te fais le plein, sinon, ce n'est pas la peine.

A の発言の最後の部分に、上記の発話が位置している。その情報の二つの要素、「旅行の実現」と「旅行の非実現」を受けて、B の返答が続いている、と分析できる。

これに対して、同じ発話を今度はディスクールの観点から観察してみる。旅行が実現する場合ガソリンを満タンにする必要があり、旅行が実現しない場合は満タンにする必要がない、という了解のある状況を設定しよう。あくまでも情報の観点を保持するなら、*peut-être* を含む上記の発話を論拠にすると、その二つの情報のどちらに基づいた結論でも自然なディスクールを構成することができるはずである。しかし、

Fais-moi le plein : j'aurai peut-être un long voyage à faire en voiture.

は自然なディスクールであるのに対して、

Inutile de me faire le plein : j'aurai peut-être un long voyage à faire en voiture.

は不自然なディスクールである。つまり、この発話は「旅行の実現」が示唆する結論だけと自然なディスクールを構成する、と言わざるを得ない。一般に、ある文 P を *peut-être* で修飾すると、その全体の発話は、P の内容の実現が示唆する結論とディスクールを形成する、という記述が可能である。

次は、*presque* について。論文を執筆している人のところへ、別の人がそれを催促しに来たでしょう。このような場面で、前者が次のように言ったとする。

J'ai presque fini de rédiger mon article.

この発話を、まず情報の観点から分析してみよう。論文をほとんど書き上げた、ということは、まだ完全には終わっていないということである。したがって、ここから得られる情報は、「論文の全体量のうち、大半を書き上げ、少し残っている」といったところだろう。論文全体がまだ終

わっておらず、それが完全に出来上がるにはまだ時間が必要である以上、催促する人はまだ暫くの間待たなければならない。したがって、情報の観点に留まるなら、「待つ必要がある」という帰結が引き出される。

ディスクールの観点から見るとどうなるか。この発話を論拠にすると、

Tu n'auras pas à attendre longtemps mon article : j'ai presque fini de le rédiger.

このディスクールは自然であるのに対し、

Tu vas devoir attendre mon article : j'ai presque fini de le rédiger.

これは不自然である。つまりこの発話は、「待たなくてもよい」というような、あたかも論文がもう終わっているかのような状況を表す結論と自然なディスクールを形成するが、情報の観点から予想される「待たなければならない」という結論とは結び付かない。

これに対して、à peine という表現はちょうど対称的な働きをする。上記の presque の場合と同じ状況を想定して観察してみよう。まず、

J'ai à peine fini de rédiger mon article.

という発話からどのような情報が得られるか考えてみよう。論文を書き終えたばかりである、ということとは、「発話時点の少し前に論文が全て完成している」という情報に等しい。したがって、「その論文を催促する人間は待つ必要がない」という帰結が無理なく導き出されるはずである。ところがこの発話を論拠とする自然なディスクールは、

Tu vas devoir attendre mon article : j'ai à peine fini de le rédiger.

であり、

Tu n'auras pas à attendre longtemps mon article : j'ai à peine fini de le rédiger.

というディスクールは不自然である。この発話は、あたかもまだ論文が完成していないかのような、「待たなければならない」という結論と自然なディスクールを形成する。そしてここでもまた、情報から予想される結論と結び付くと不自然なディスクールになってしまう。

最後は、aussi...que という同等比較の構文。次の発話の情報は何だろうか。

Pierre est aussi grand que Marie.

おそらく、「ピエールとマリーという二人の人間の身長が同じである」というようなものであろう。換言すれば、「*Pierre a la même taille que Marie.*」という発話とほぼ同義である、ということになる。そうだとすると、二人の大きさの同等性を述べているだけで、どちらかがそれ自身で大きいとか小さいとかいうこととは無関係である。

可能なディスクールの構造はどうであろうか。まず、ピエールが年下であるが年齢の割に大きくて、年上のマリーと同じくらい大きい、という状況を想定しよう。ここで、

Pierre est grand pour son âge : il est aussi grand que Marie.

あるいは

Marie n'est pas grande pour son âge : Pierre est aussi grand qu'elle.

というディスクールは自然である。

次に、ピエールが年上であるが年齢の割に小さく、年下のマリーと同じくらいの背丈しかない、という状況を想定しよう。ここで、

Pierre n'est pas grand pour son âge : il est aussi grand que Marie.

あるいは

Marie est grande pour son âge : Pierre est aussi grand qu'elle.

というディスクールはいずれも不自然である。

つまり、この比較構文の発話を論拠にすると、「ピエールは大きい」あるいは「マリーは小さい」という内容の結論と形作るディスクールは自然であるが、「ピエールは小さい」あるいは「マリーは大きい」という結論のディスクールは不自然になる。ちなみに、先の「*...la même taille...*」という発話は、この四つのうちのどの結論と結び付けても自然なディスクールができあがる。一般に、*X aussi P que Y*という比較構文は、*X*は*P*という性質を持ち、*Y*はそれを持たないかのような内容のディスクールを形成する。

Ⅲ. 条件文

本稿の主題である条件文の分析⁵⁾に移ろう。上に提示された方法を使うと、どのような記述ができるか観察してみる。

まず $\text{Si } P, Q$ という条件文を情報の観点から記述するとどうなるか。論理学の諸概念を応用した分析⁶⁾がそれに相当すると思われるが、その場合 P が Q の十分条件を表現している、ということになるだろう。確かに、条件文を、それが使用される状況から完全に切り離し、それが解釈される文脈を捨象し、 P と Q がそれぞれ命題を表現していると仮定した上で二つの命題の関係を調べてみると、なるほど一方が他方の十分条件を表していると言ってもいいような、すなわち前者が真であるとき後者も真になるような例が見つからないわけでもない。しかしこの記述は、 P が成立すると Q も成立する、と言っているだけで、 Q そのものが実際に実現するともしないとも明言していない点に注意しておこう。

ディスクールの中で条件文はどのように理解されるであろうか。次のような状況を設定しよう。マリーという人が、何らかの理由で、天気の良い場合にやって来る予定である。また、彼女の訪問は喜ばしいものであり、実際に来る場合は食事を用意して歓待することが望ましい、という了解がある。ここで、次のような発話があったとする。

S'il fait beau, Marie viendra. Prépare-lui un repas!

条件文全体の発話を論拠、残りの発話を結論と考えると、自然なディスクールである。これに対して、同じ状況で

S'il fait beau, Marie viendra. Inutile de lui préparer un repas.

というディスクールは不自然である。

論理的に考えると、マリーは確実に来るわけではないので、来る可能性と来ない可能性は五分五分の筈である。ところが、この条件文を論拠にすると、あたかも彼女が来るということが確定しているかのような内容の結論が自然なディスクールを作り、彼女が来ないということを前提するような結論のディスクールは不自然である。 $\text{Si } P, Q$ の P を前件、 Q を後件と呼ぶと、一般に一つの条件文全体が論拠になった場合の潜在的結論は、後件の内容が実現した状況を示唆するようなものであり、その逆ではない。

ここで、「*Inutile...*」の例も自然なディスクールである、という反論があるかもしれない。確かに、マリーが不愉快な人物で、厚かましくやって来たならわざわざ食事を準備しないで嫌がらせをしてやろう、という状況では自然に解釈できる。しかしこの場合もやはり Q の成立が前提になっているからこそ自然なディスクールになることに変わりはない。しかもこの状況では逆に最

初の例のほうが不自然になる。

条件文のディスクールにおける役割は原則として以上のようなものである。しかし一見するとこの記述と少しずれるように思われる例がある。例えば、

Tu réussiras si tu travailles. Ne reste donc pas à ne rien faire!

あるいは

Tu seras malade si tu fumes. N'achète donc pas de cigarette!

のような例は、上の記述にうまく当てはまらない。これをどう扱ったら良いだろうか。

前者を、「Si tu mets la table, tu auras un bonbon. Il faut que tu la mettes.」というディスクールと比較してみよう。両者の共通点は、まずディスクールの受け手にとって、条件文の後件が表す内容（「合格する」「キャンディーを貰う」）が実現すると、それが利益をもたらす、と解釈できる点である。また、ディスクールの結論が、条件文の前件の内容（「勉強する」「テーブルを用意する」）の実現に向けて努力するよう促している点も同じである。また「cigarette」の例と「Si tu vas te promener, tu seras puni. Tu ne dois pas aller te promener.」というディスクールを比較すると、今度は逆に、条件文の後件の内容（「病気になる」「罰を受ける」）は不利益になると解釈でき、ディスクールの結論が条件文の前件の内容（「煙草を吸う」「散歩に出掛ける」）の実現を妨げるよう促している点に気付く。

以上の観察は次のようにまとめることができる。条件文 Si P, Q において、Q が聴き手にとって利益と解釈されるか不利益と解釈されるか、あるいは「良」と判断されるか「悪」と判断されるかにより、前者であれば P の実現を示唆する結論が、後者であれば P の非実現を示唆する結論が、それぞれ自然なディスクールを形作ることになる。

こう考えると、ここに上げたような例は全て、最初に試みた、条件文のディスクールにおける記述と矛盾しないことが分かる。確かに、条件文の後件に関する価値判断が作用してディスクールの結論が選択されるという違いはあるが、あくまでも後件の実現を前提するという原則は守られている。つまり、ここに挙げたような例では、まず第一段階として後件の内容の実現が暫定的な結論として得られる。次に第二段階としてその内容が実現すると仮定した場合の利害関係の判断が加わる。ここで、「利益になるものはその原因を推進し、不利益になるものはその原因を妨げる方が良い」という一般原理を仮定しよう。また前件の内容は後件の内容の原因を表している、と考える。そうすると、後件の内容についての価値判断と、この一般原理に鑑みて、前件の内容を肯定的に理解するか否定的に理解するかという判断を経て、最終的な結論が得られる、と説明できる。

とはいうものの、このような価値判断を含む例が少なくないため、それ自体で一つの用法をなす、と考えて分類した方が便宜上都合が良い。したがって以下では、条件文に価値判断が伴わず、

それ全体の潜在的結論が単純に後件の潜在的結論と同じである条件文をタイプ1と呼び、その下位範疇として、後件が「良」と解釈されるものをタイプ2, 「悪」と解釈されるものをタイプ3と呼ぶことにする。

IV. 応 用

以上の記述の妥当性を検証するために、幾つかのテキストを分析してみる。とりわけ条件文が比較的独立した形で使われている例を取り上げる。いずれの例でも、条件文を取り巻く前後の文脈の中に使われている表現に注目するが、それが何故使われているのか、それが一定の解釈しか受け付けられない場合何故そうなのか、何故別の解釈は不可能あるいは困難なのか、という問題が生じる。上の記述を仮説として前提するとこのような疑問にうまく答えられる、ということを明らかにしたい。

最初の例は、モーパッサンの『放浪者』(*Le vagabond*, in *Contes et nouvelles*, II, Gallimard, « Pléiade », 1979) から。職を求めて放浪している男が、ある村にたどり着く。仕事はないかとぶらついていると、ここで禁止されている物乞い行為にあたるとして、憲兵に捕えられ、役所に連行される。村長が一通り取り調べを行い、保釈が決定する。男は、村から追放される前に、食べ物と要求するが、村長は一笑に付して拒否する。そこで男は次のように言う。

Si vous me laissez encore crever de faim, vous me forcerez à faire un mauvais coup.
Tant pis pour vous autres, les gros. (p.863)

(もし腹が減って死にそうなのをこのまま放っておいたら、悪事を働けと言うようなもんですぜ。お気の毒ですなあ、旦那方。)

この例で「Tant pis」という発話がそれに先行する条件文とどのような関係にあるか考えてみよう。少なくとも二つの解釈が可能である。まず、条件文が全体として「何か食べ物を与えよ」という内容を婉曲に命令している、という解釈。発話の受け手は既にこの要求を拒否しているので、いわば「与えない」と「与える」ことの間でジレンマに陥る。発話者の男はこのような状況を受けて「お気の毒」と言っている。この解釈を採用するなら、条件文をタイプ3の図式で分析することができる。「悪事を働く」ことが発話の受け手にとって不利益なことである、と解釈しよう。するとタイプ3の図式では、「このまま放っておく」ことを否定するような結論、つまり「食べ物を与える」という結論が示唆されることになる。

もう一つの解釈。男は、「このまま放っておく」という条件の下に「悪事を働く」と言っているだけで、無条件に「悪事を働く」というわけではない。しかしこの発話は、「悪事を働かない」という可能性には触れずに、「悪事を働く」可能性の方を示唆している。あたかも「悪事を働く」ことが実現しているかのような前提で、「お気の毒」という発話は解釈される。この場合、条件

文はタイプ1の図式に従って分析できる。

次の例は、『ガリア人アステリクス』(Goscinny et Uderzo, *Astérix le Gaulois*, Dargaud éditeur, 1961) から。紀元前50年, ガリアのほぼ全域がローマに占領されている中で, かたくなに抵抗を続けている村落があった。アステリクスやオベリクスが住む地域である。彼らはローマ兵と戦っても絶大の力を発揮して必ず勝利を収める。その秘密は, パノラミクスという名のドルイド僧(druide)が薬草を使って調合する妙薬である。ローマ軍の隊長カイウス・ボヌスはその処方を知るべくパノラミクスを捕え, 妙薬の秘密を吐かせようとする。

[Caius Bonus] — Druide, si tu parles, je ferai de toi un homme riche et puissant!

[Panoramix] — Non! (p.24)

(ドルイド僧よ, もししゃべるなら, お前を富と権力の備わった男にしてやるぞ。——いやだ!)

ここでパノラミクスは何に対して「non」と言っているのだろうか。「non」という発話は, 文法形式の面から言うと, 一般に疑問文あるいは命令文に呼応する形で使われるが, この例はその限りではない。また意味的に考えると, 「non」は質問に対する否定的返答, あるいは要求や提案などに対する拒否に使われる。この点を考慮に入れてここでのやり取りを大まかに分析すると, 少なくとも二つの解釈が可能である。一つは, カイウス・ボヌスの発話は単なる条件と帰結の関係を表現しているのではなく, ある種の提案を行っており, パノラミクスはそれを拒否している, という見方。この場合, 条件文をタイプ1と見なして, カイウス・ボヌスが「.....してやる」ということをほとんど明言しているに等しい, と考えると理解できる。もう一つは, この条件文はある種の要求を行っており, パノラミクスはそれを拒んでいる, という解釈。この場合, 条件文をタイプ2と考えると, 「富と権力が備わる」ということがパノラミクスには利益になることであると解釈されることから, 条件文の発話全体が「しゃべる」ことを促している, と分析すると説明がつく。

次は、『笑い話辞典』(Hervé Nègre, *Dictionnaire des histoires drôles*, Livre de Poche, 1973) に収められている「ド・ゴール」と題する笑い話である。場所は天国, 神が玉座に腰掛けている。国家元首が天国にやって来ると, 慇懃に振る舞おうとして, わざわざ立ち上がって出迎えることにしている神が, ド・ゴールが来た時は立ち上がろうとしない。そばにいた聖ペテロが, 「彼は教会の長女たるフランスの大統領ですぞ。お立ちになったほうがよろしいのでは。」と耳元で囁くと, 神が答える。

Jamais de la vie. Si je me lève, il va s'asseoir à ma place... (p.312)

(とんでもない。もし立ち上がろうものなら, あの男はここに座ろうとするぞ.....)

「とんでもない」は「私は立ち上がらない」と解釈しよう。この発話とそれに続く条件文は何ら

明示的な表現で接続されていないが、少なくとも一つの解釈として、後者が前者の理由を説明している、と読むことが可能である。この解釈が可能だと仮定した上で、その結び付きを分析してみよう。この連鎖が結論—論拠のディスクールで、しかも論拠に位置する条件文がタイプ3であると仮定しよう。更に、ド・ゴールが「座る」ことは神にとって不利益なこと、あるいは少なくとも好ましくないことである、と仮定しよう。すると、この条件文の発話全体の潜在的結論は、「立ち上がる」ことを制するような内容になるはずである。それゆえ「立ち上がらない」という発話を正当化する解釈が可能になる、と説明できる。

V. 展 望

ここでは、タイプ1から3までの記述だけでは予測できないような現象を扱う。条件文を単独では観察せず、複雑な文脈の中で使用されている例を取り上げる。とりわけ、ディスクールの観点から記述できる他の表現(d'ailleurs と justement)と組み合わさった場合、どのような効果が生じるか、という点に着目する。

最初の例は、既に引用した『ガリア人アステリクス』から。パノラミクスを救出するため、アステリクスは敵陣に乗り込むが、捕らえられる。カイウス・ボヌスの執拗な脅迫に屈するふりをして、パノラミクスは妙薬を作ることに同意するが、実際は頭髮や髭が絶え間無く伸び続ける薬を調合する。カイウス・ボヌスはこれを飲み、その効果に激怒してパノラミクスとアステリクスを怒鳴りつけ、解毒剤を作るよう要求する。

[Caius Bonus] — Je vais vous tuer! Donnez-moi du contrepoison!

[Astérix] — Tsk, tsk, tsk! Si tu nous tues, nous ne pourrions pas faire de contrepoison!

[Caius Bonus] — !

[Astérix] — D'ailleurs, aujourd'hui, nous sommes un peu fatigués... (p.40)

(殺すぞ! 解毒剤を出せ! —— [指を振って窘める動作] 俺達を殺したら、解毒剤は作れないぜ! ——! [驚きの表情] ——それに、今日はちょっと疲れているんでね.....)

この例の条件文について、二つの側面から観察してみる。まずカイウス・ボヌスの発言との関係。次に d'ailleurs によって導入される発話との関係。

まず第一の点。二人の登場人物のやり取りを、次のように分析しよう。カイウス・ボヌスは「殺すぞ」という発話で脅迫している。これに対して、アステリクスは条件文の発話でこの脅迫に対抗し、「殺してはいけない」ということを示唆している。この解釈が可能であると仮定して、その理由を考えてみよう。まず条件文の後件(「解毒剤を作れない」)の内容が、カイウス・ボヌスにとって不利益な事柄である、と解釈できる。そこで、この条件文がタイプ3だと仮定すると、前件の内容(アステリクスとパノラミクスを殺すこと)を禁止するような内容の結論が示唆され

る、と説明できる。

次に第二の問題。まずデュクロの研究⁷⁾を参照しながら、本稿の概念枠組の中で d'ailleurs という表現の働きを記述しておこう。X と P, Q を発話とすると、一般に X P, d'ailleurs Q という構造には二つの特徴がある。まず P と Q がそれぞれ論拠となり、共通の結論 X とディスクールの形成する。また X の論拠として P だけで十分であるところに、Q はいわば二次的な論拠として、後から付加されたものという性質を持つ（上の図式で X の位置は重要ではない。また、X そのものが潜在的結論であってもよい）。« Je ne vais pas louer cette salle : elle est trop chère, d'ailleurs elle ne me plaît pas. » を例に取ると、次のように分析できる。「部屋を借りない」という結論に対して、「(家賃が) 高すぎる」とことと「(部屋が) 気に入らない」とことの二つが論拠として提示されている。その上、前者が決定的な論拠、後者は付随的なものと見なされている。ここで、de plus や par ailleurs と比較すると、d'ailleurs の特徴がはっきりする。de plus や par ailleurs は複数の事柄を単に列挙するだけである。したがって、ディスクールの構造には関与しない。

以上の記述に従って、アステリクスの発話を分析しよう。この記述が正しいとすると、条件文の発話と、d'ailleurs 以下の「疲れている」という発話が同じ潜在的結論を示唆する、ということになる。ここで少なくとも二つの可能性がある。

一つ目は、「(カイウス・ボヌスが) 解毒剤を手に入れるのは困難である」というような結論を想定する解釈。この場合、まず条件文全体が決定的論拠としてこの結論を示唆する。次に「疲れている」という発話が二次的論拠として付加される。

しかしここで問題が生じる。条件文が「解毒剤を手に入れるのは困難である」という結論とともにディスクールを形成するということを認めると、この条件文そのものをどのように分析したらよいだろうか。おそらくタイプ1と分類するのが妥当であろう。後件の内容（解毒剤を作れない）が成立しているという前提から「解毒剤を手に入れるのは困難である」という結論へ至ることは十分に可能である。そうだとすると、この条件文は既に見たようにまずタイプ3として解釈され、次にタイプ1として再解釈される、ということになる。

換言すれば、同じ一つの条件文が、多様な文脈要素のどの部分と関連付けられるか、ということに応じて異なるタイプの解釈を可能にする、ということである。この点は上の記述と矛盾するものではないが、記述そのものから予想されていたことでもない、新しい事実である。

もう一つの解釈。「疲れている」という発話の結論は、「解毒剤を作れない」とこと、と考える。つまりこの発話は、条件文の後件の内容そのものを結論としてディスクールを構成する、という解釈である。この場合、条件文をタイプ1から3のどの図式にも当てはめることができない、という問題が生じる。一つの解決策として、条件文という構造そのものがディスクールを構成する、と考えてみよう。前件が論拠、後件が結論である。この考え方を認めると、アステリクスの発言は次のように分析できる。まず「(カイウス・ボヌスがアステリクスとパノラミクスを) 殺す」ことが「解毒剤を作れない」という結論の決定的論拠として提示される。次に、この同じ結論に対して、「(アステリクスとパノラミクスが) 疲れている」という二次的論拠が付加される。

この二つの解釈のうち、後者の方がより適切な分析であるように思われる。そうだとすると、既に言ったように条件文の内部構造がディスクールと同じ性質を持っているという仮説がどうしても必要になるだろう。

次に、ジュール・ロマンの『クノック』(*Knock*, Gallimard, « folio », 1924) から取られた例を分析する。ここでは、条件文と *justement* という表現の組み合わせが問題になる。

ある村に赴任した医師クノックは、医学的知識を振り翳し、健康な人間までも病人に仕立てようと企んでいる。衛生観念がほとんど無い村民を教育する必要があるという口実で、村の教員ベルナールに協力を要請する。まず手始めに、腸チフスについて講演をすることを提案する。この病気の原因、感染経路、感染した場合の症状などを紹介せねばならぬと詳細に描写するクノックに、教師は辟易する。

BERNARD, *le cœur chaviré*.

C'est que... je suis très impressionnable... Si je me plonge là-dedans, je n'en dormirai plus.

KNOCK

Voilà justement ce qu'il faut. Je veux dire : voilà l'effet de saisissement que nous devons porter jusqu'aux entrailles de l'auditoire. Vous, monsieur Bernard, vous vous y habituerez. Qu'ils n'en dorment plus! (*Penché sur lui.*) Car leur tort, c'est de dormir, dans une sécurité trompeuse dont les réveille trop tard le coup de foudre de la maladie. (p.72)

(その.....私は感じ易い方でして.....そんなことにのめり込んだら、眠れなくなってしまうですよ.....——それですよ、まさに必要なのは。つまり、それこそショックによる効果、聴衆の腹の底まで伝えなければならない効果だと言いたいのです。ベルナールさん、貴方は慣れますよ。奴らは眠ってはいけない! (身を屈め) だって奴らの過ちは、眠ることなんですから。安全だと思い込んで、突然の病気に呼び覚まされたらもう遅い。)

非常に複雑な例なので、幾つもの解釈が可能であるが、議論を明確に進めるために、次のように敷衍しておこう。ベルナールが「のめり込む」のは、医学的問題に関心を持つこと、あるいはその結果として病気について科学的知識を得ることである。例えば、クノックが説明した腸チフスの例のように、細菌というものは至るところに繁殖しており、人間たるものに常に病気になる危険に脅かされている、というような知識である。このようなことを真剣に考えていると、「眠れなくなる」というわけである。またこのような知識を講演の主題にすれば、村民もまたぞっとするであろう。彼らは、今まではこのような知識が無かったため、病気のことなど考えずに「安全だと思い込んで眠っていた」のであるが、それ以降は緊張感のせいで落ち着いて眠れなくなるだろう。これがクノックの言う「ショックの効果」である。

ここではまずデュクロの *justement* の研究⁸⁾を参考にして、ディスクールの観点からこの表現を記述しておく。D を一つのディスクールとし、その論拠を X、結論を Y とする。一般に D — *Justement* という構造において、*justement* の発話者は、X を受け入れつつ、Y に対立する結論を示唆する。「Tu dois être content : il fait chaud. — *Justement!*」というやり取りを見てみよう。前半は、「暑い」という論拠と「満足している」という結論からなるディスクールである。*justement* の発話者は、「暑い」ということを認めつつ、「満足している」に対立する結論すなわち「不満である」を示唆している。この発話者の態度を敢えて言語化するなら、次のようになるだろう。「君は、暑いということを拠り所にして、私が満足しているだろうと言う。確かに暑いというのは事実だが、まさにその理由によって、私は不満なのだ。」

クノックの「*justement*」がこの記述を満たしている、と仮定しよう。すると、二つの点に注目しなければならない。まず、ベルナールの発話の中に、論拠—結論のディスクールを見付け出す。あるいは結論は潜在的であると考えて、論拠だけを取り出す。いずれにせよ、クノックが受け入れている論拠でなければならない。次に、クノックがその論拠によって正当化している結論を見付け出す。しかもそれはベルナールの結論に対立するものである。換言すれば、クノックとベルナールが合意していることと、対立していることを探し出さねばならない。

まず両者がどの点において対立しているか考えてみよう。どうやら医学的問題に関心を持ち、それに頭を悩ませることの是非と言ってよさそうである。ベルナールはそれに反対、あるいは少なくとも脅威を感じている。クノックは賛成し、推奨している。そしてその論拠は何かといえば、いずれの場合も、頭を悩ませると眠れなくなる、という因果関係である。つまりベルナールは、頭を悩ませると眠れなくなる、ゆえに頭を悩ませたくない、ということを主張している。逆にクノックは、頭を悩ませると眠れなくなる、ゆえに頭を悩ませるべきである、と主張している。

これで *justement* の図式は完成できる。ベルナールは条件文を論拠とし、「頭を悩ませるのはよくない」という潜在的結論を示唆している。これに対してクノックは、「*justement*」の発話でこの同じ条件文を論拠として受け入れつつ、「頭を悩ませるべきである」という逆の結論を示唆している。

この分析を裏付けるために、条件文をどのように解釈する必要があるだろうか。ベルナールについてはタイプ3と仮定し、しかも「眠れない」ことが悪である、という前提があれば説明できる。一方クノックについてはタイプ2と仮定し、「眠れない」ことは好ましい、という前提を付け加えれば説明できる。そうすると、既に見たのと同じ現象、つまり同一の条件文が二つのタイプの図式に従って解釈される、という問題が生じる。

しかも更に重大な問題が生じる。*justement* を「共通の論拠」という概念で記述したが、クノックの例でも本当に同一の論拠が問題になっているのだろうか。確かに、ベルナールが論拠にしているのは自分自身について語っている条件文そのものだが、クノックが論拠にしているのは「教師ベルナールが頭を悩ませると、眠れなくなる」ということではなく、厳密に言うと「村人たちが頭を悩ませると、眠れなくなる」あるいは「一般的に、頭を悩ませると眠れなくなる」ということではないだろうか。つまり前者は個人を対象にした因果関係、後者は一般的因果関係を問題

にしており、無視できないずれが認められる。これは条件文の問題というよりは *justement* の記述にかかわるものであるが、いずれにせよ条件文の内部に、個別と一般のずれを受け入れるような構造を仮定せねばなるまい。

本稿では、条件文全体を一つの発話と見なして、それを論拠とするディスコースの性質を中心に議論したが、*d'ailleurs* と *justement* の例を観察して分かったのは、条件文の内部構造についての考察が必要である、という点である。この問題を更に深く掘り下げれば、条件文の記述がより完全なものになるだろう。

註

- 1) 本稿で提示している方法論は、オズワルド・デュクロ (Oswald Ducrot) の言語理論から直接の影響を受けている。しかし、概念の規定の仕方や、条件文についての細かい分析などは本稿独自のものである。デュクロの理論については、次のような研究を参照されたい。Jean-Claude Anscombre (éd.), *Théorie des topoï*, Kimé, 1995. J.C.Anscombre et O.Ducrot, *L'argumentation dans la langue*, Liège, Mardaga, 1983. J.C.Anscombre et O.Ducrot, « Argumentativité et informativité », in *De la métaphysique à la rhétorique*, M.Meyer (éd.), Bruxelles, Editions de l'Université de Bruxelles, 1986, pp.79-94. Marion Carel, *Vers une formalisation de la "théorie de l'argumentation dans la langue"*, thèse de doctorat, E.H.E.S.S., 1992. O.Ducrot, *Dire et ne pas dire*, Hermann, 1972. O.Ducrot, *Les échelles argumentatives*, Minuit, 1980. O.Ducrot, « Analyses pragmatiques », in *Communications*, 32, 1980, pp.11-60. O.Ducrot, « Note sur l'argumentation et l'acte d'argumenter », in *Cahiers de linguistique française*, 4, 1982, pp.143-163. O.Ducrot, « Opérateurs argumentatifs et visée argumentative », in *Cahiers de linguistique française*, 5, 1983, pp.7-36. O.Ducrot, *Le dire et le dit*, Minuit, 1984. O.Ducrot, « Les topoï dans la "Théorie de l'argumentation dans la langue" », in *Lieux communs*, C.Plantin (éd.), Kimé, 1993, pp.233-248.
- 2) J.C.Anscombre et O.Ducrot, *L'argumentation dans la langue*, *op.cit.*, p.117.
- 3) Paul Grice, « Logic and Conversation », in *Syntax and Semantics*, III, P.Cole and J.L.Morgan (ed.), New York, Academic Press, pp.41-58. (仏訳 « Logique et conversation », in *Communications*, 30, 1979, pp.57-72.)
- 4) peut-être と presque 及び à peine については、次の論文を参考にした。J.C.Anscombre, « Théorie de l'argumentation, topoï, et structuration discursive », in *Revue québécoise de linguistique*, 18, n°1, pp.13-56. J.C.Anscombre, « Dynamique du sens et scalarité », in *L'argumentation*, A.Lempereur (éd.), Liège, Mardaga, 1991, pp.123-146. 例文も同論文による。また比較構文については、J.C.Anscombre et O.Ducrot, *op.cit.* を参考にした。例文も同書による (省略した部分もある)。
- 5) Cf. O.Ducrot, « Albine, ou les surprises de l'innocence », in *Le dialogue*, G.Maurand (éd.), Toulouse, Université de Toulouse-le-Mirail, 1991, pp.1-29. O.Ducrot, « Opérateurs argumentatifs et analyse de textes », in *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*, W.J.Ashby et al. (ed.), Amsterdam, Benjamins, 1993, pp.45-62. 例文も同研究による。
- 6) このような態度の研究には、次のようなものがある。Benoît de Cornulier, *Effets de sens*, Minuit,

1985. Robert Martin, *Inférence, antonymie et paraphrase*, Klincksieck, 1976. R.Martin, *Pour une logique du sens*, PUF, 1983 (2e édition revue et augmentée : 1992).
- 7) O.Ducrot *et al.*, *Les mots du discours*, Minuit, 1980.
- 8) O.Ducrot *et al.*, « *Justement*, inverseur argumentatif », in *Lexique*, 1, 1982, pp.151-164.
O.Ducrot, « Topoi et formes topiques », in J.C.Anscombe (éd.), *op.cit.*, pp.85-99.

[付記] 本稿は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。